## ⑵ 企　画　展

### 企画展「まるごと林真理子展」

**期　間**　令和２年９月11日（金）～11月23日（月･祝）　56日間

**趣　旨**　本県出身の直木賞作家・林真理子（山梨市生まれ）の初の展覧会。
1982（昭和57）年に初めてのエッセイ集『ルンルンを買っておうちに帰ろう』がベストセラーに。1986（昭和61）年に直木賞を受賞し、その後も、現代社会を鋭い切り口で描いた小説や、歴史に取材した長編小説など、多彩なテーマと巧みな語り口で、次々に作品を発表した。文壇の第一線で活躍を続ける林真理子の活動をたどり、作品の魅力を紹介した。
会期中、林真理子氏が「週刊文春」連載中のエッセイ「夜ふけのなわとび」で、「同一雑誌におけるエッセイの最多掲載回数」（認定記録は、2020（令和２）年７月２日時点の1,655回）としてギネス世界記録に認定され、10月24日（土）よりギネス記録の公式認定証を展示。さらに、2020年に創刊50周年を迎えた雑誌「an･an」（マガジンハウス）が立ち上げたanan AWARD50周年大賞を受賞し、11月10日（火）よりトロフィーを展示した。

**展示構成**　マリコ・クロニクル１　～1970’
マリコ・クロニクル２　～1981’
マリコ・クロニクル３　～1990’
マリコ・クロニクル４　～2000’
マリコ・クロニクル５　～2010’

上左　等身大パネルとともに撮影ができる展示室内の撮影スポット
上右　芸術の森公園内に設置した自筆のイラストパネル（計10基）
下　　anan AWARD50周年大賞トロフィー（手前）

## ⑶ 特　設　展

令和２年度の特設展として「飯田龍太展 生誕100年」（４月21日～６月21日)、「文学の中の富士山」（７月18日～８月23日）の開催を予定していたが、新型コロナウィルス感染拡大防止のため、「飯田龍太展 生誕100年」は令和３年１月23日（土）～３月21日（日)、「文学の中の富士山」は令和３年７月17日（土）～８月29日（日）に延期した。

代替展示として「特別展示　初公開　甲府発の太宰治書簡」を下記のとおり実施した。

なお、例年１月から３月にかけて開催する「新収蔵品展」は、令和２年度は行わなかった。

### ①　【特設展の代替展示として開催】

### 特別展示　初公開　甲府発の太宰治書簡

**期　間**　令和２年７月18日（土）～８月23日（日）　33日間

**趣　旨**　太宰治が高田英之助に宛てた書簡で全集未収録の初めて公開される新出資料を関連資料とともに展示。高田英之助（1911～1991　広島県生まれ）は、太宰と同じく井伏鱒二に師事し太宰の結婚の手助けをした人物。離ればなれに暮らす高田夫妻を気の毒に思い、書簡ではみずからの結婚生活の様子を伝え、早く一緒に暮らせるようにと励ました。甲府での充実した生活ぶりを伝えた貴重な書簡。

### 展　示　資　料　一　覧

太宰治　高田英之助宛書簡　1939（昭和14）年１月31日（推定）

写真パネル

銀座のバー・ルパンで　1946（昭和21）年12月　撮影 林忠彦

婚約者石原美知子の家族と甲府市水門町（現・朝日１丁目）の石原家で　1939（昭和14）年元旦

太宰と妻美知子の結婚式　1939（昭和14）年１月８日

太宰夫妻に家を貸した大家・穐山家前

三鷹の飲み屋で　1948（昭和23）年２月23日　撮影 田村 茂

杉並の井伏鱒二宅にて　1942（昭和17）年１月１日

井伏が描いた英之助像

初公開!!
太宰治 直筆葉書
一九三九（昭和十四）年一月三十一日（推定）

太宰治略年譜

## ②　特設展　飯田龍太展 生誕100年

**期　間**　令和３年１月23日（土）～３月21日（日）　50日間
＊当初、令和２年４月25日（土）～６月21日（日）の実施を延期して開催。

**趣　旨**　戦後を代表する俳人・飯田龍太（1920～2007　笛吹市境川町生まれ）の生誕100年を記念して開催。当館が収蔵する直筆の書や原稿、愛用の品々などによって作品と人物の魅力を紹介した。

### 展　示　資　料　一　覧

（※は個人蔵）

#### 境川村小黒坂

「後山の記（一）～（三）」原稿

#### 病と戦争と

飯田蛇笏筆「御届」
「三十歳のころ」原稿

#### 戦後の台頭

「満月に目をみひらいて花こぶし」軸装
「紺絣春月おもく出でしかな」軸装※
「山河はや冬かがやきて位につけり」額装※
「冬の海てらりと遊ぶ死も逃げて」額装
「雪の峰しづかに春ののぼりゆく」軸装
「母が割るかすかながらも林檎の音」短冊
「大寒の一戸もかくれなき故郷」色紙
朝井閑右衛門筆「蛇笏、三好達治、龍太」額装

#### 蛇笏逝去

「雪山のどこもうごかず花にほふ」軸装
「つばめ去る鶏鳴もまた糸のごと」軸装
「紙ひとり燃ゆ忘年の山平ら」色紙
「どの子にも涼しく風の吹く日かな」軸装
「あつき湯に水さす春の夕餉どき」色紙
「春暁の竹筒にある筆二本」額装
釣り竿「わすれね」

#### 敬愛する人―井伏鱒二

井伏鱒二「飯田龍太の釣」原稿
幸富講寄せ書き額装
井伏鱒二「今月今日記－俳句と女史のアルバイト船」原稿
井伏鱒二　飯田龍太宛葉書　1959（昭和34）年２月11日
井伏鱒二　飯田龍太宛葉書　1959（昭和34）年３月27日
井伏鱒二　飯田龍太宛書簡　1969（昭和44）年２月15日
飯田龍太　井伏鱒二宛書簡　1963（昭和38）年10月16日
井伏鱒二「蜜柑の木」原稿
井伏鱒二　飯田龍太宛書簡　1976（昭和51）年６月20日
井伏鱒二「虹のいろいろ」原稿
飯田龍太　井伏鱒二宛書簡　1985（昭和60）年10月13日

#### 一月の川一月の谷の中

「一月の川一月の谷の中」軸装
「雪の日暮れはいくたびも読む文のごとし」軸装

「炎天のかすみをのぼる山の鳥」色紙
愛用品①　作務衣※、カシミヤのカーディガン※、バーバリーのジャンパー※、パナマ帽、カメラ（ミノルタ）と革製ケース
庄野潤三「飯田龍太著『無数の目』」原稿

## 第六句集『山の木』

「あるときはおたまじゃくしが雲の中」軸装
「かたつむり甲斐も信濃も雨の中」額装
「山の木」草稿
愛用品②　硯、筆※、墨※
「黒猫の子のぞろぞろと月夜かな」額装
「白梅のあと紅梅の深空あり」軸装※
「水澄みて四方に関ある甲斐の国」軸装※
「茸にほへばつつましき故郷あり」色紙
「冬の雲生後三日の仔牛立つ」色紙
愛用品③　落款

## 『涼夜』・『今昔』と随想集

「去るものは去りまた充ちて秋の空」軸装
「返り花咲けば小さな山のこゑ」色紙
「山起伏して乱れなき大暑かな」色紙

## 第十句集『遲速』、「雲母」終刊

「白雲のうしろはるけき小春かな」軸装
「なにはともあれ山に雨山は春」扇面額装
「露深し不意にめでたき空のいろ」色紙
「千里より一里が遠き春の闇」色紙
「山梨県立白根高等学校校歌」楽譜　山梨県立白根高等学校蔵
「山梨県立白根高等学校校歌」原稿コピー
自句自解「なにはともあれ山に雨山は春」原稿
愛用品④　笊、皿、灰皿、ライター入れ、現代俳句協会賞を受賞した際に贈られたロンジンの懐中時計（全て※）印伝の小銭入れ、自作の楊枝と楊枝入れ、小刀、眼鏡、天眼鏡、モンブランの万年筆、ボトルインク
『カラー図版　日本大歳時記』、竹箒
七句貼交屏風

## 散文の魅力

「萩の箸」原稿
「その日の風景」原稿
「旅・歳時記（1）」原稿
「中村汀女の句」原稿

## 龍太の俳句を読む

「八〇句」原稿
「長崎にて」原稿
鈴木六林男　飯田龍太宛葉書　1980（昭和55）年11月17日
高橋睦郎「俳句の後山　諸若葉潜りて後山高からず」原稿
「『雲母』の終刊について」原稿コピー

## 山廬交友

金子兜太「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」額装
桂信子「ゆるやかにきてひとゝとあふほたるの夜」短冊
森澄雄「うしろすがた」原稿

「森澄雄の風姿」原稿
金子兜太　飯田龍太宛葉書　1978（昭和53）年１月７日
上田三四二　飯田龍太宛葉書　1980（昭和55）年２月25日消印
塚本邦雄　飯田龍太宛書簡　1965（昭和40）年12月４日
三浦哲郎　飯田龍太宛葉書　1976（昭和51）年３月30日
安岡章太郎「茄子にも花　南瓜にも花」色紙
安岡章太郎　飯田龍太宛書簡　1993（平成５）年10月８日
八木義徳「花盛りの一日」原稿
金子兜太「潔癖な男ー龍太信仰と俳壇引退と」原稿
金子兜太「「戦後俳句」のなかの龍太」原稿
金子兜太「龍太を辿る」原稿
金子兜太「座談会のことなど」原稿

## 「雲母」の継承

廣瀬直人「正月の雪真清水の中に落つ」短冊
福田甲子雄「ふるさとの土に溶けゆく花曇」色紙